

原子力長計 市民ウォッチング

民主的・論理的、そして透明な長計策定プロセスをめざして
グリーン・アクション気付

2004年10月15日

拝啓 秋冷の候、みなさまには、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、今回送らせていただく資料は、各原子力施設立地地域の市民の意見と、新計画策定会議の傍聴を続ける市民の意見を参考にまとめたものです。

これらの資料は、すべての策定委員に配布し、また、報道機関に公開するにとどまらず、関係閣僚や国会議員*、原子力施設立地地域の自治体や議員など関係者へも配布いたします。さらに、核不拡散など海外にも関係する問題については、海外のNGOを通じてIAEAなどの国際機関、関係諸国への配布も予定しています。

私たちは、国民の幅広い意見を審議に反映させていただきたいと思い、これらの資料を送付させていただきました。ご査収くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

敬 具

* 本日、一部の資料については国会議員全員に配布いたしました。

原子力長計市民ウォッチング事務局

● 原子力長計市民ウォッチングとは ●

長期計画の策定プロセスが民主的、透明、かつ論理的に行われることを市民の視点からモニタリングする市民オンブズです。定期的に提案もさせていただきます。この市民オンブズは、グリーン・アクション、日本消費者連盟の呼びかけで立ち上がった市民ネットワークです。



原子力長計市民ウォッチングより
原子力新計画策定会議委員へ

「策定」のふりをしている「策定会議」を、少しでも本物に

はじめに

6月21日から始まった新計画策定会議は、10月7日には9回を数え、核燃料サイクルの4つの基本シナリオ（①全量再処理、②部分再処理、③全量直接処分、④当面貯蔵）の総合評価を行うため、10の視点（①安全の確保、②資源節約性及び供給安定性（エネルギーセキュリティ）、③環境適合性、④経済性、⑤核不拡散性、⑥技術的成立性、⑦社会的成立性（社会受容性）、⑧選択肢の確保（柔軟性）、⑨政策変更に伴う課題、⑩海外の動向）の提案と審議が一巡しました。

一方、現行長計に記された六ヶ所村再処理工場「2005年操業開始」は、昨年9月に「2006年7月」に先延ばしされました。日本原燃による不祥事、あるいは東京電力の検査データ改ざんや関西電力美浜事故などによる青森県民の原子力への不安と事業者への不信の高まりにより、ウラン試験およびアクティブ試験が毎月のように先送りされています。

ここまでの審議でようやく評価の数字がでてきたところであるにもかかわらず、すでに大多数の委員から現政策である全量再処理路線の維持に対する強い希望が語られています。「核燃料サイクル」の総合評価としつつ、全量再処理路線におけるプルトニウムを利用する高速増殖炉やプルサーマルの実現性については全く触れられていません。一方、日本国内では、新たな原子力施設の立地や稼動について住民の同意を得ることは事実上不可能となっています。

逆に直接処分路線については、回を追う毎に「使用済み核燃料の置き場」の問題が大きくなりあげられ、再処理やめると原発が止まるという「脅し」の論理で議論が進められつつあります。

原子力長計市民ウォッチング ―― 民主的・論理的、そして透明な長計策定プロセスをめざして
グリーン・アクション気付

原子力の長期計画を評価・議論していく場であるはずなのに、国策を変更すると混乱するという理由で現状追認の意見が次々に出されることに大変なとまどいを覚えます。日本の国策は一度決めたらどこまでも、状況がどう変わろうとも変更できないのでしょうか。客観的に国策を評価、決定していくことはできないのでしょうか。

新計画策定会議では、10月22日の第10回会合に中間報告の事務局提案が予定されています。第9回会合後の記者会見で近藤駿介委員長は「あと3回くらい議論してくれば合意してくれるのではないかと述べていました。6月15日の原子力委員会決定にある「意見募集や市民参加懇談会の開催等により幅広く国民の意見を聴取して、これを審議に反映させる」ことを実現しないで、11月中にも最終結論を出す準備を整えたことは容認できない進め方です。

私たち原子力長計市民ウォッチングは、原発立地地域（各地）の市民の意見と策定会議の傍聴を続ける市民の意見を参考にし、この文章をまとめました。この文章は、すべての策定委員に配布し報道機関に公開するだけでなく、関係閣僚や国会議員、立地自治体や議員など関係者へも配布します。また、国際NGOを通じたIAEAなどの関連機関、関係諸国への配布も予定しています。私たちは広く開放され国民の意見が審議に反映されるよう、新計画策定会議に望むものです。

現在の原子力長計策定プロセスとそれを伴う審議は、社会的現実から著しくかけ離れているものです。根本的原因是、2000年に策定された現行長計の評価を行わないまま、今の新長計議論を進めているからでしょう。現行長計の評価を行うということは、この4年間の社会のリアリティに照らすということにもなり、それを元に、新長計策定の審議が、もっと地に着いたものになるはずで

第9回原子力策定会議で示されたシナリオ①から④は、現行長計策定が抱えている社会的現実からかけ離れている問題を再び痛々しくものがたっています。再び、絵に描いた餅をこんどは4種類見せられているわけです。現実味がないものを4種類いくら「議論」しても、国民の為になる政策を作りようがありません。

「策定」のふりをしている「策定会議」を、少しでも本物に近づけるための手段として、以下の問題提起と提案を市民として行います。